コラム
人・動物・動物園

美郷カレッジにて

小　松　　守
（秋田市大森山動物園 園長）

秋田県の美郷町、素敵な町名だ。開けた仙北平野の田園風景は秋田、いや日本を代表する景観の一つのようにも思える。東北の脊梁、奥羽山脈の一座、真昼岳の特徴的な形は美郷をさらにどっしりと引き立ててもいる。

農業が基幹産業の町だろうが、スポーツ、芸術との交流、製薬会社や航空会社など様々なジャンルとの関係構築などで刺激的な空気感も漂う。また町が企画する美郷カレッジでは全国から名だたる方々を招聘し、町民への刺激と美郷の積極的発信にもつなげている。

その美郷町から光栄にも11月の美郷カレッジでの講話依頼があった。過去の錚々たる講師陣を拝見すると気おくれしたが、美郷を訪ねるたびに包み込んでくれる自然を思い浮かべ、自然体で話せばいいだろうとお引き受けした。

動物園で長く動物と動物を見る人を観てきた者として、自然物である人を動物と重ねながら考えてみようと、演題を「動物世界を通して人を考える」とした。いかにも大上段な演題にしてしまい後悔もしたが、動物世界と「自然物である人間」の世界、双方の奥底にある大切なものを素人の私なりに探ってみることにした。

「自然物としての人間」、この重厚で奥深い表現は歴史小説家の司馬遼太郎のエッセー「21世紀に生きる君たちへ」に発見した言葉だが、深い意味を訴えてくるものがありずっと私の心に留めていた。

動物園という人工的環境とはいえ野生動物が見せる仕草は、人と似ていたり、人と同じだなと感じることが多く、両者の根底に通じる大事なものがあるのだろうと私は考えている。人、動物は共に自然に生きる自然物として、その大事なものを捨て去ることなく持ち続けてきたに違いない。いや、人はそれを動物から受け継いできたはずだろうと思う。

しかし、自然との関わりが薄れ、自然と乖離しかけている現代社会では、自然物として受け継いできた大事なものが解りにくくなっているような気もする。根底にある大事なものを時に再考してみることも必要ではないだろうか。

ところで、今年１月、同町にある学友館で開催されていた大小島真木氏の特別展「“起源と対話”木・火・土・金・水」を訪ねた。澄み切った青空を背景に真っ白に輝く真昼岳と美郷の空気を感じながら、人と自然、その起源を探った５つの大壁画と対面した。自然思想哲学とも言える五行説にも着目、生きる起源を探り、人も動物も皆自然に包まれ生きる存在、根が同じであることを主張したように感じた。大森山動物園が掲げるテーマ「動物と語らう森」、人と動物が向き合い、シンパシーや同じ生き物にあるココロを感じてもらいたいという思いとどこか通じあっているところがあるように思えた。

人を生物的、動物的に捉えながら人間（ヒューマン）を科学（サイエンス）する「ヒューマニエンス」という番組がＮＨＫから放送されている。専門家を交え、様々な切り口で人という動物を捉えようとしているようだが、今の時代、人を掘り下げ考えようとする空気があるのだろうか。

美郷で行った拙い私の素人講話は、自然は動物と人に生きるための神秘的とも言える絶妙な仕掛けを施していることを伝えたかった。動物、人だけではなく、生き物の目に見える姿や形、動きなどすべては自然がつくり与えてくれた芸術的とも言える尊いものだが、目に見えないココロの世界にも自然は極めて緻密な仕掛けを施しているように思えるからだ。

自然は生き物すべてにあまねく逆境を乗り越えてゆく「挑戦のＤＮＡ」と「いのちをつなぐ」ための絶妙な仕掛けを与えて、それは今の私たちにも受け継がれているはずだ。

生き物は常に地球や生態環境の厳しい変化に見舞われ続け、そのたびにそれを乗り越えようと挑戦し続けてきた。だから今、動物も人も生きている。いかにも非科学的表現だが、私はそれを「挑戦のＤＮＡ」と呼ぶ。動物たちが高度に進化するほど生き方は複雑さを増してゆくが、へこたれず果敢に立ち向かい続ける挑戦心を根底に持ち続けてきた。いのちが持つ特別な精神性のようにも、あるいは、いのちの本質のようにも思えてくる。人という動物の登場、存在はその結果としてあるのだろう。

全盛を極めていた恐竜を絶滅に追いこんだ寒冷はすべての動物にとって厳しい環境だったが、それに対し偶然と必然の条件を予見でもしているかのように「挑戦のＤＮＡ」をいかんなく発揮して乗り越えた動物が我々の先祖の哺乳動物とも言える。

さらに恐竜絶滅後、爆発的に放散する哺乳動物の一部は、これまで誰も進出しなかった森、その樹上に冒険に出たのだ。まさに挑戦心だ。樹上の三次元空間で新生活を切り拓いた動物は人の先祖、サルの仲間だ。彼らは極めて濃厚な「挑戦のＤＮＡ」の持ち主だったに違いない。未体験ゾーンの生活は無論、苦労の連続だったろうが、それをバネにサルたちは体と脳を特異的、加速度的に発達させ、高度な生き方を仕上げていった。その力は森から出された原始の人に脈々と受け継がれていた。身を守ってくれた森から出され、生き抜くため備えた能力すべてを発揮し、道具や言葉をつくり、そして他者と力を合わせ、助け合い生きる社会を編み出し、やがて人になった。人は極めて色濃い「挑戦のＤＮＡ」を最大限に発揮し続けてきた自然物であることを前段でお話した。

後段では、進化と生活の高度化に伴い動物たちは生物学的な少子化を余儀なくされたが、自然はより確実にいのちをつなぐ仕掛けを動物に与え哺乳動物を誕生させ、それは人の社会づくりの始まりであるという話をした。

哺乳動物は生き抜くために恒温性を発達させ、それに合わせて出来上がった汗腺や皮脂腺は自然の仕掛けで乳腺に変化、子は乳汁をもらい育ち生存率を上げた。授乳が母子に肌のふれあう環境を与えたことで、大脳は急速に発達、子は親を見てまね、学べるようになった。それは教育の原点であり、自然の巧妙な仕掛けでもある。

子育てという画期的な母子関係は愛着形成につながり、発展して人と人がつながる人間社会の基礎となり展開していく元になっている。いのちをつなぐ仕掛けは、母子のつながり、母が子を守り、子が母を求める、相互認識と信頼関係はしだいに成熟し、目には見えない愛というものに昇華していった。愛やココロも自然の仕掛けの結果登場したものでもある。

以上が美郷カレッジでの講話の概要であるが、今、自然物としての人間は、自らが追求した便利さやスピードの中、雲のように沸き上がる人工的な世界に埋もれ生きようとしているが、人と動物をつくった自然の仕掛けはそこまで予測していたのであろうか。不安である。